

柴田哲雄著

協力・抵抗・沈黙

——汪精衛南京政府のイデオロギーに対する比較史的アプローチ

成文堂／2009年11月／448頁／8500円

協力・抵抗・沈黙

——汪精衛南京政府のイデオロギー
に対する比較史的アプローチ——

柴田哲雄 著

成 文 堂

森 久男

戦後日本の中国近現代史研究は、中華人民共和国の成立を主導した中国共産党が、旧中国の新中国への「翻身」（人民の解放）を齎したという単線の歴史認識が風靡し、中国国民党による国民革命史の検討が等閑に付されてきた。しかし、一九八六年に中国現代史研究会編『中国国民政府史の研究』が汲古書院から出版されてのち、従来タブー視されてきた南京国民政府史の研究が本格化し、二一世紀に入るや、それまで日本の「傀儡」として一面的評価を受けてきた汪精衛政権の真相に迫る学術書も登場しはじめている。

本書の課題は、「日本軍占領下で成立した汪精衛南京政府下のイデオロギー状況」の分析にあり、イデオロギーを「政治・道徳・宗教・哲学・芸術等における、歴史的、社会的立場に制約された考え方」として広く定義し、汪精衛・陳公博らの首脳が指導した汪兆銘政権の諸政策構想のイデオロギーを分析するのみならず、日本軍占領下の上海で流行した歌謡曲にまで視野を広げて、民衆の支配的情緒を考察している。

中国では、汪兆銘政権について、日本に投降した「傀儡」であるという評価が定着している。しかし、本書は米国人研究者ボイルが一九七二年に公刊した研究（*China and Japan at War 1937-1945: the Politics of Collaboration*）の問題意識を踏襲して、「協力」という概念に着目し、汪政権の対日関係を単に「傀儡」として単純化するのではなく、その「協力」と「抵抗」の多様な側面を析出する一方、その対極にある同政権下民衆の「沈黙」と対比させている。

本書の構成は次のとおりである。

はじめに

第一部 大衆をめぐるイデオロギー状況

第一章 官製国民運動——東亜連盟運動と新国民運動

第二章 汪精衛の外交観・政治体制観

の連続性と非連続性——東亜連盟運動の理念への結実をめぐる

第三章 中国青少年団の成立と展開

第四章 学校教育政策——中学における

政治教育を中心に

第五章 大東亜戦争博覧会

第六章 日本軍占領下の上海における

流行歌

第二部 陳公博の思想的変遷と汪政権の

経済政策構想

第七章 陳公博の中国共産黨員時期前後における思想的変遷

第八章 陳公博における反共主義の確立——渡米から改組派結成にかけて

第九章 陳公博の対外認識と対内政策構想——改組派時期から蔣汪合作政権時期にかけて

第一部では、汪精衛政権下の大衆をめぐるイデオロギー状況として、第一章で官製国民運動である東亜連盟運動と新国民運動を取り上げ、これらの運動が日本の対中国政策に対して有した意義について

第三部 汪政権とヴィシー政府との比較

第一章 汪精衛とフィリップ・ペタン

第二章 陳公博とジャック・ドリオ

第三部 汪政権の経済政策構想——

政経関係を中心に

第三部 汪政権とヴィシー政府との比較

第一章 汪精衛とフィリップ・ペタン

第二章 陳公博とジャック・ドリオ

第三部 汪政権の経済政策構想——

政経関係を中心に

第三部 汪政権とヴィシー政府との比較

第一章 汪精衛とフィリップ・ペタン

第二章 陳公博とジャック・ドリオ

第三部 汪政権の経済政策構想——

政経関係を中心に

て分析し、第二章で東亜連盟運動の理念に結実する汪精衛の外交観と政治体制観の連続性と非連続性について、第三章で新国民運動の一環として一九四三年に汪政権によって設立された中国青年団について、第四章で汪政権の中学での政治教育を中心とする学校教育政策について、第五章で一九四二年に南京で開かれた大東亜戦争博覧会について考察している。

他方、第六章は日本軍占領下の上海における流行歌の歌詞に反映された社会的情緒を、とくに周璇・李香蘭に焦点を合わせて考察している。

第二部では、汪精衛政権で実業部長に就任し、汪精衛死後代理主席を務めた陳公博の経済政策構想の変遷、および汪政権の経済政策構想について考察し、第七章で一九二一年の中共設立総会に参加した陳公博の中共黨員時期前後の思想的変遷について、第八章で中共離党後陳渡米から改組派結成までの反共主義の確立について、第九章で改組派の時期から蔣汪合作政権に到る陳の対外認識と対内政策構想との諸関係について論じている。第

一〇章は上海租界における民間資本家層に対する施策に留意しながら、汪蔣合作政権期・汪政権期に陳が提起した経済政策構想の連続性を確認し、一九四三年の日本の新対華政策実施以後汪政権が民間資本家と対立した要因について検討している。

第三部では、日本軍と協力した汪政権とドイツ軍と協力したフランスのヴィシー政府を比較し、第一章で汪精衛とヴィシー政府（非占領地域）国家主席フィリップ・ペタンの外政観、体制観、新国民精神のあり方の異同や背景について分析し、第二章で陳公博とナチス占領地域の対独協力者ジャック・ロドリオの占領軍に対する協力と反共主義との関係と比較して、二人の転向の契機、戦前の対ソ連・共産党観、日独の脅威への認識を考察している。

汪精衛南京国民政府に関する過去の出出版物は、小林英夫・林道生両氏の著書『日中戦争史論——汪精衛政権と中国占領地』御茶の水書房、二〇〇五年）に代表されるように、政治史・外交史からア

プローチしたものが多く、他方、本書は従来の類書とは対照的に、文化史・社会史・経済史・教育史・民衆史を視野に入れたイデオロギー状況の分析に重点を置き、汪政権最高首脳である汪兆銘・陳公博の革命思想の連続性と非連続性の時系列的考察を縦糸とし、イデオロギー宣伝の対象である中国青少年団、中学における政治教育、大東亜戦争博覧会、さらには上海の流行歌の歌詞に込められた占領地民衆の政治意識を横糸として、汪政権の日本に対する「協力」と「抵抗」の多様な側面を重層的に描き出している。

本書が東亜連盟運動と汪精衛の政治思想との関連について論じた第一章・第二章において、汪政権の東亜連盟運動イデオロギーの内的構造を多面的に分析したことは、興味深い試みである。すなわち、日本・中国・満州の間の超国家的組織の樹立による紛争の原因除去を目指す東亜連盟の三原則（「政治の独立」「経済の互惠」「軍事の同盟）の中で、汪精衛は「政治の独立」の原則に着目し、これを孫文の「大亞洲主義」（大アジア主

義）と結びつけることによって、汪政権の自主性と対日協力（大東亜共榮圏構想）とを両立させたと評価し、さらに対内的には汪政権による東亜連盟運動の新民運動への発展を展望している。

本書は汪政権に東亜連盟運動を広めた支那派遣軍司令部付辻政信少佐（のち、第三課長、大佐）の証言（『亜細亜の共感』亜東書房、一九五〇年）を利用して、この回想録は、汪精衛の書（『大亞洲主義即東亜連盟』）と支那派遣軍參謀長板垣征四郎中将の書（『八紘一宇即東亜連盟』）の写真を添付して、同運動の本質をずばりと表現しており、必読文献だと思われる。戦前、転向左翼平野義太郎は、汪精衛を引用しながら、孫文の三民主義思想の発展として「大亞洲主義思想に基く日華結合の紐帯」（『大アジア主義の歴史的基礎』河出書房、一九四五年）を強調している。本書が汪精衛の大アジア主義を取り上げながら、このテーマと関係が深い平野の著作に論及していないことには、若干の不満が残されている。

本書の第三章は、一九四三年末の中国

青少年によるアヘン禁煙運動について論じ、江口圭一氏の「日本の毒化政策に対する中国国民の憤激があった」（『日中アヘン戦争』岩波新書、一九八八年）という所説を批判して、日本側の禁煙運動に対する「黙認」を配置している。本書の記述は江口説に勝っているが、前掲『亜細亜の共感』によれば、汪政権の禁煙政策は支那駐屯軍第三課長辻大佐の軍司令官への具申に基づいて実施されたもので、支那駐屯軍は禁煙政策を「黙認」したのではなく、上から決定したのである。

汪政権下の中国青少年団の考察、学校教育の実態、大東亜戦争博覧会等については、これまで指摘されても、具体的に考察されてこなかったので、興味深い事例分析として高く評価できる。

戦前上海における流行歌から世相を読み取る試みは、通俗読み物に多く見受けられるが、歴史学者の視点からこのテーマを取り上げた点に新工夫が認められる。なお、本書は、周璇の音楽の学習歴の浅さと「甘美な歌声ながらも素人の域

を出なかつた歌唱力」（二二一頁）を結びつけている。しかし、周璇の次男の回想録（周偉・常晶『我的媽媽周璇』山西教育出版社、第二版二〇〇二年、全七〇三頁）には、彼女の歌手デビュー前、およびアメリカ人音楽教授から受けた熱心なレッスンの様子が記されており、本書の立論は強引すぎると思われる。

本書は、陳公博の共産党入党、離党、訪米、国民党入党、改組派時期、南京国民政府への参加、汪政権への参加という目まぐるしい政治的変遷の中で、彼の反共主義の確立、対外認識、対内政策構想および経済構想について時系列的な考察を加え、彼の思想遍歴の中でその思想の一貫性を洞察している。とくに、陳の経済政策構想と民族資本の動向の分析は、類書にない新鮮な叙述と言えよう。

本書は比較史という視点が顕著な特徴となっており、第三部の「汪政権とヴィシー政府との比較」にその本領が発揮されている。柴田氏はこの研究のため、フランス語を一から学んで原資料に当たっている点に、その熱意を見て取ることが

できる。

なお、本書は第一次国共合作末期に中共が農民暴動を推進した点を、「共産党が二回革命論を放棄し、国民革命から共産主義革命に路線転換した」（三九四頁）と評価しているが、中共は二段階革命論を放棄したことはなく、当時の革命戦略論への誤解があると思われる。

本書は汪精衛政権に対する「傀儡」という一面的評価を避け、当時の中国社会内部のイデオロギー状況を重層的に解明し、汪精衛の革命思想における「連続性」と「非連続性」、対日関係における「協力」と「抵抗」の微妙な関係を具体的に描き出している。この手法は歴史に対する複眼的視点を提供しており、高く評価することができる。

他方、汪政権の「傀儡」性の考察を主要な研究テーマとしながら、汪政権と日本側諸機関（支那派遣軍・政府顧問・特務機関）との関係に関する具体的考察が少ないことは、違和感を感じる点である。将来著者のさらなる研鑽に期待したい。